

吃音の現象学——まなざしの呪縛——

永 井 広 克

吃りは、いうまでもなく、私と外界とのあいだに一つの障碍を置いた。最初の音がうまく出ない。その最初の音が、私の内界と外界との間の扉の鍵のようなものであるのに、鍵がうまくあいたためしがない。一般の人は、自由に言葉をあやつることによって、内界と外界との間をあげっぱなしにして、風とおしをよくしておくことができるのに、私にはそれがどうしてもできない。鍵が錆ついてしまっているのである。

三島由紀夫『金閣寺』

1. はじめに

吃音は最も普遍的に見られる言語障害である反面、非常にその実態がつかみにくいそれである。吃音の特徴のひとつは、その発現がむら気なことである。すなわち、「吃音者」は話せば常に吃るわけではない。吃る場合もあれば吃らずに「正音者」と変わりなくスラスラと話せる場合もある。いうならば、吃音者は両義的な存在なのである。それでは、吃音者はいかなる状況において吃るのであろうか。吃音者は他者が眼前に存在しない単独な状況における一人言や本の朗読などには、普通、吃らないものである。このことは、吃音者の発声器官には何ら異常な所はないのだから当然といえる。吃音者が吃るのは、あくまで他者が吃音者の眼前に臨在する対面的な状況においてなのである。

ところで、言葉を他者に向かって話すという記号行為=発話行為⁽¹⁾は、単独の人間だけで行なうことはできなく、必ず話し手および聞き手という二人以上の人間が必要とされる共同行為である。したがって、発話行為は対面的な「自己-他者」関係を前提にするのであり、自己および他者は話し手および聞き手という役割を相互に交換しつつ、各々のまなざしを交錯させ合う。さらに、話し手は自己の発する声を聞きながら、⁽²⁾聞き手に向かって話しかけるが、このことは話し手は同時に聞き手の役割をも引き受けていることを示している。話し手は他者をまなざす「主体-自己」と他者によってまなざされた「客体-自己」を同時に体験しているのである。ところで、人間は自己充足的な実体的存在ではなくて、常に他者の承認を必要とし、かつ、他者という鏡を通して自己を見つめるといった、他者および自己自身に対する関係的存在である。そして、この関係存在性が最もあらわになるのは、主体-自己と客体-自己を同時に体験する発話行為においてである。

吃音は恒常的（実体的）な言語障害ではなく、個別的・対面的な「自己-他者」関係において発現する偶発的（关系的）なそれである。それゆえ、吃音は人間の関係存在性をネガティブに露呈させている言語障害といえよう。

本稿は〈成人〉の難発型吃音を自己-他者関係から現象学的に記述することを旨とするものであ

る。一般に、いかにも吃りらしいと考えられている連発型吃音に較べて、一見、吃りだとは見えない（気づかれない）難発型吃音にこそ吃音者が味わう苦痛がひそんでいるからである。

2. 吃音者と思春期

吃音の発現形態は、「タタタマゴ」のように同じ一音を繰り返す連発型と、「～タ ッ マゴ」のように、第一音にぐっと詰まって言葉がなかなか発音されない難発型との2類型に大別される。⁽³⁾そして、連発型吃音は難発型吃音を基礎づける関係にあり、前者は後者へと進展するが、それは累積の過程でもあるので、〈成人〉の吃音者にとっては、この2類型が混在して発現するが、あくまで、吃音者に特有の高度な吃り方⁽⁴⁾である難発型吃音が中核をなす。

連発型吃音から難発型吃音へ進展するのは、思春期⁽⁵⁾を境目としてである。思春期以前は、無邪気に、かつごく自然に吃っていた〈幼児〉の連発型吃音「者」は、思春期を迎えると自己の吃音を恥じるようになり、それを他者のまなざしから隠そうと身構えるようになる。自己の吃音を他者のまなざしから隠す一番確実な方法は、話すことそれ自体をやめることであり、また、話しやすい状況や言葉を選んで話すことである。したがって、連発型吃音から難発型吃音への進展の過程は、他者から見ると、治癒の過程に見えることもありうるわけである。だが、吃らずに話そうとする吃音者の意識的な努力が必ず成功するとは限らない。逆に、発話行為それ自体に対する意識的な努力が、かえって吃音を招いてしまう場合が重なると、吃音者は話すことを始める前から吃るのではないかと不安に襲われ、それが昂じると話すことそれ自体を怖れるようになる。ここに至って、自己の吃音を羞恥し、不安さらには恐怖という情動で染め上げて、それを〈予期〉する難発型吃音「者」が誕生することになる。

それでは、連発型の幼児の吃音者は思春期を迎えると、なぜ自己の吃音を恥じるようになるのであろうか。なるほど、言葉はなめらかに流れるべきだという社会規範から見れば、同じ音を繰り返す連発型吃音はこっけいであり、また、異常な発話行為⁽⁶⁾である。しかし、異常者はすべて自己の異常さを恥じるわけではあるまい。

ここで、注目しなければならないのは思春期を彩る特有の情動は、羞恥だということである。すなわち、思春期以前の自己と他者が明確に分化していない融合状態⁽⁷⁾にまどろんでいた自己は思春期の自〈我〉の目覚めと相関的に他〈我〉をも鋭く意識するようになる。他者の身体は客観的な〈眼〉であると同時に、主観的な〈まなざし〉ともなって自己の眼前に立ち現われてくる。他者の身体は自己が見ることが客観であると同時に、自己をまなざす主観でもある両義的な存在となる。そして、他者の身体の両義性を通して、自己の身体の両義性も把握される。「自他は一つの系の二つの項」⁽⁸⁾だからである。

3. 吃音者と身体の両義性

思春期を経過して連発型吃音から難発型吃音へと自己の吃音を進展させた成人の吃音者が、自

己の吃音についていただく特有の情動は羞恥であり、また、話すことそれ自体に対する不安さらには恐怖であった。

羞恥とは、「自己についての羞恥であり、私はまさに他者がまなざしを向けて判断しているこの対象であるということの承認である」⁽⁹⁾とすれば、成人の吃音者とは、自己の吃音について羞恥し、私はまさに他者がまなざしを向けて自己を吃音者であると判断しているものと承認する者となる。連発型の幼児の吃音者の問題はもっぱら、かれを取り巻く他者、とりわけ、意味ある他者にとっての問題であったのに対して、成人の吃音者の問題は、今や、吃音者本人にとって切実な問題として先鋭に意識化されることになったわけである。

また、羞恥は自己の対他存在性の体験であるから、主観—身体、客観—身体に次ぐ第3の身体すなわち、〈私にとっての私の対他身体〉⁽¹⁰⁾を開示する。恥ずかしさの意識において、私にとっての私の対他身体が最も生きられているのである。したがって、今まさに、主観—他者のまなざしにからめとられて、吃りつつある吃音者は、羞恥という情動に溺れながら、私にとっての私の対他身体を肥大的に生きていくといえよう。

羞恥と並んで、成人の吃音者が自己の吃音についていただく特有の情動に、吃るのではないか、という不安さらには恐怖がある。人間は未来に起こる不確定なことに対しては不安を感じ、さらに過去の経験から自己がその不確定なことを制御できないことが明白な場合、不安は恐怖へと昂進する。未来とは逆方向に投影された過去にほかならないからである。発話行為のみならず、あらゆる行為は、身体によって具体化されない限り、あらかじめ右か左かを予期することはできても、確定することはできない。吃るという発話行為にもこのことが当てはまり、吃るか、吃らないかを吃音者がどちらかを不安さらには恐怖といった情動で染め上げて〈予期〉することはできても、実際に話してみない限り確定することはできない。難発型の成人性の吃音者とは、吃るという予期が的中する場合があまりにも多く過去において重なったので、今や、未来における発話行為それ自体をも恐怖⁽¹¹⁾するようになった者のことである。

ところで、吃音はある種の失語症患者に見られるように、自己が発音すべき能記（語詞映像）が脳裡に浮かばないために起こる言語障害でないことは、もはや、いうまでもない。それは、能記を音声言語として他者に向かって外化する際に起こる言語障害なのである。音声言語は能記の線的特質にしたがって、時間的な継起に沿って外化されるが、吃音は音声言語の時間的な流れが異常な言語現象であり、それを生理学的に言えば、呼吸作用の乱れにほかならない。⁽¹²⁾ この呼吸作用の乱れを引き起こすのは、発話行為それ自体に対する不安や恐怖といった自己作用的に働く情動⁽¹³⁾であると、少なくとも難発型の成人の吃音者の場合にはいえよう。発話行為それ自体は、いわば、中立の情動で、かつ、自律的（無意識的）に行なわれるべきものであり、意識的な発話努力はかえって、そのなめらかな遂行を阻害する結果となってしまうのである。意識と身体とは因果的な連関ではなくて、非因果的な連関によって結合されているのであり、人間の行動のなかには意識的に制御しようとする、逆に、それが阻害されてしまうのもあり、発話行為においても、意識は、それを遂行する身体的な動きではなくて、自己が外化すべき能記に志向していれば、ごく自然に行なえるのである。ところが、吃音者にとっては、発話行為それ自体に対する意識的

な制御が働くので、その身構えが、精神と身体の間を媒体とする交流⁽¹⁴⁾に乱れを生じさせ、それが呼吸作用の乱れとなって、言葉がなめらかに発音されなくなるといえるであろう。

4. まなざしとしての主観－他者

主観－身体、客観－身体という身体の両義性が最もあらわになるのは、〈二人がかりの作業〉である発話行為においてであり、吃音者が吃るのは、主観－他者のまなざしにさらされて自己が客体化されている相互主観的な場においてであった。むしろ、他者のまなざしも両義的なものであるが、発話行為を遂行中、もしくは遂行前の吃音者にとっては、それは脅威的なものとして意識され、まるで魔術にでもかかったかのように、かれはなめらかに話すことができなくなってしまふのである。こうした石化状態において、吃音者は「他者のまなざしのもとでは、私は世界のただなかに凝固したものとして、危険にひんしたものとして、癒されがたいものとして私を生きる」⁽¹⁵⁾のである。いわば、話すことを始めたときに、聞き手としての客観－他者が〈爆発〉して主観－他者になり、そのまなざしの奔流に押し流されて、発話行為の遂行に必要な主観－自己と客観－自己のかねあいを破ってしまった話し手としての吃音者は、私にとっての私の対他身体を肥大的に生きるために、意識と身体は分裂を起し、話そうという意識をもってしても（あるいは、話すことそれ自体に対する意識的な努力のゆえにこそ）身体の発声器官をうまく行使できなくなるのである。

主観－他者のまなざしの奔流に押し流されて、発話行為の遂行が困難におちいった吃音者には一種の知覚の解体という現象が起こる。まさに、言葉が劈^{ひら}かれぬ身体を生きる吃音者は、自分の口元にばかり注意を向け、他のものはいっさい知覚の背景へ後退する。⁽¹⁶⁾これは、外界との調和ある交流が断たれた状態であり、能記が音声言語となって外化されない沈黙状態においては、吃音者の内的時間はその流れを止め（あるいは、目まぐるしく流れ）自己の身体は石化した如くに感じられる。この石化状態において、吃音者は他者が自己の吃音にまなざしを向けているものと先鋭に意識するのである。しかし、他者のまなざしを意識するのは、あくまで自己自身であり、他者の主観を自己が完全に把握することは不可能であることを考えれば、実際は、他者がまなざしを向けていない場合もありうるわけである。そして、まなざしは自己から自己自身へ指し向ける仲介者⁽¹⁷⁾であるとすれば、それは自己についての幻想であるといえよう。

吃音者は、他者が自己の吃音にまなざしを向けているものとして羞恥するわけだが、それは、たんに吃音者の自己幻想にすぎず、聞き手としての他者は話し手としての吃音者の吃音に、特にまなざしを向けていないのが実状であろう。だが、意識ではいくら自己幻想だとわかっているとしても他者のまなざしにさらされた場に臨むと身体がいうことをきかなくなる事態に吃音者の苦しみがある。意識と身体は非因果的連関によって結ばれているから、意識によって身体を制御することは不可能とまではいえないにしろ、かなり困難なことなのである。

発話行為は能記の線的特質にしたがって、時間的な継起に沿って行なわれるから、吃音とは、精神と身体の間を時間的な統合が錯綜するために起こる言語障害なのであり、連発型吃音は精神と身

体との無意識上ないしは半意識上の錯綜なのに対し、難発型吃音はそれら両者の意識上の錯綜であるといえないであろうか。そうであるとすれば、ゆっくり話せば吃らないという事実にも納得できる。ゆっくり話すことによって、精神と身体とが時間的に同調しやすくなるからである。けれども、言葉の〈扉〉である第一音が外化されてこそ、ゆっくり話すこともできるのであり、その第一音の発音に吃音者は四苦八苦するのである。

ところで、異常な発話行為である吃音も発話行為であることに変わりないが、それは〈影〉の発話行為といえるものである。そして、それを〈遂行〉するものは、異常性を通して初めて浮かび上がってくる〈影〉の身体と考えられる。影の身体とは、現実統合体としての身体の深層に潜む錯綜体としての身体⁽¹⁸⁾であり、あらゆる偶発性の根源なのである。それゆえ、主観―他者のまなざしを、自己幻想的に内在化して、その奔流に押し流されて、今、まさに吃りつつある吃音者は、羞恥という情動の渦巻に巻き込まれ、主体―身体と客体―身体との均衡が沈没してしまい、私にとっての私の対他身体のみを危機的に生きているために、発話行為の遂行者である現実統合体としての身体が時間的に崩壊してしまい、精神と身体の時間を媒体とする交流が錯綜し、その両者が同調不能となった結果、呼吸作用が乱れて発話行為の遂行が不可能もしくは困難になる、とでも表現できようか。

ともあれ、「言葉とは、われわれの実存が自然的存在を超過している。その余剰部分である」⁽¹⁹⁾にもかかわらず、言葉は「自然的表現の一能力である身体」⁽²⁰⁾によってしか外化できないという世界内存在の逆説性（両義性）に、吃音は起因することは確かであろう。

5. おわりに

本稿は、正音〈者〉にも共通する連発型吃音ではなく、吃音〈者〉に特有な高度な吃り方である難発型吃音の現象学的記述を目ざすものであり、連発型吃音ひいては発吃の原因には立ち入らなかつた。難発型吃音こそが、吃音者に「人生からの隔絶感」を味あわせるからである。そこで最後に、吃音の〈矯正〉について一言して結びにかえたい。

結論を先にいえば、吃音は治りにくい言語障害なのである。ただ、連発型吃音の場合は難発型吃音に進展する前に、自然に治癒して行く例も多いと推定される。連発型吃音〈者〉は、ごく自然に、かつ無意識に吃っており、それを禁圧しようという身構えないことが、それを〈捨てざる〉結果を生むのであろう。問題なのは、連発型吃音を進展させた難発型吃音〈者〉の場合である。むろん、重症、軽症の程度の差はあれ、吃音とは恒常的な言語障害ではなく、偶発的なそれであるから、彼らは実体なきものとの格闘を強いられるわけである。したがって、意識的な矯正努力によってある程度は治癒できるとはいえ、それは早晚、〈再発〉する運命にある。その再発が、吃音者に自己の〈無能力さ〉を思い知らせることとなる。

ここで、人間とは、他者および自己自身に対する関係的存在であることに注目しよう。この関係的存在のゆえに、人間は、さまざまな他者に対して何らかの役割を演じ分けているのだが、吃音者は、自己自身に対して吃音〈者〉という〈役割〉を演じているといえそうである。自己に対

して吃音者という役割を演技することによって自己確認を行っているといってもよい。ある吃音者がふと、もらしたことがある。自分の吃りが治ってスラスラと話せるようになったとたん、何かしら不安な気持ちに襲われたと。おそらく、この不安は、長年の自分は吃音者であるという自己確認が〈破綻〉したことに起因するのであろう。いうならば吃音者は意識の上では、吃りたくないと思いつつも、無意識のうちでは吃ることによって吃音者としての〈自己の存在証明〉を得ているのではないのであろうか。換言すれば、吃音者とは、吃音者で〈ある〉現実と、吃音者で〈ない〉現実を〈ねじれさせて〉生きている逆説的な存在なのである。したがって、この両者の〈現実〉の間の〈ねじれ〉を〈矯正〉すればよいわけである。すなわち、自分は〈自ら好んで〉吃音者となっていることをしかと自覚し、そのことに〈開き直れば〉よいのである。自分が吃音者であることを、他者、そして何よりも自己自身に対して〈宣言〉し、自己の吃りを他者のまなざしの下に、さらけだせばよいのである。⁽²¹⁾

だが、吃音者には、その開き直りがとてつもなく困難に感じられるのである。〈吃りたくない〉という〈現実〉を生きている吃音者には〈吃りたい〉という無意識的な〈現実〉への〈跳躍〉が要求されるのである。その両者の現実のはざまに横たわる深淵に、吃音者は圧倒されるのである。それでは、その跳躍に至るにはどのような方法が考えられるであろうか。

まず、吃音者が個人的に行なう方法について述べよう。吃音は呼吸作用の乱れで起こる言語障害にはかならないから、呼吸を整えることが重要となる。事実、腹式呼吸法は、従来から吃音〈矯正〉法の主力をなしてきた。だが、そこでは発声訓練と同程度の表層的な効用しか求められてこなかった。しかし、腹式呼吸法には深層的な効用こそ求められてしかるべきなのである。すなわち、「呼吸は無意識の世界の唯一の回路である」から、腹式呼吸法をすることで自己の無意識の世界と〈対話〉を行なうのである。それとの対話を通して、自分は吃音者で〈ありたい〉という無意識的な〈願望〉が浮かび上がってくるはずである。そして、その無意識的な願望を意識的なそれへと〈上昇〉させるのである。

次に、吃音者が集団的に行なう方法に取りかかろう。ふだん、吃音者は自己は吃音者で〈ある〉現実を生きているわけだが、この、〈ある〉現実には、吃音者で〈ない〉現実を対置させるのである。前者が吃音者にとって日常的な現実であるとすれば、それに対する非日常的な現実を創設するわけである。吃音者が、自己は吃音者で〈ない〉現実を生きる時間・空間を非日常的に作り上げるのである。そこで考えられるのが〈演劇〉である。演劇という非日常的な〈いま・ここ〉において、吃音者は、吃音者で〈ない〉現実を生きるのであり、その、吃音者で〈ない〉現実によって、吃音者で〈ある〉現実を〈活性化〉させるのである。吃音者の意識のうちで、自己は吃音者で〈ある〉現実と、吃音者で〈ない〉現実とを緊張関係におくといってもよい。そして後者の現実が前者の現実を〈圧倒〉するようになればよいのである。そして、それを成し遂げて吃音者で〈ない〉現実を日常的に生きるようになった者は、逆説的に、自己は吃音者で〈ある〉ことを受け入れた者なのである。

むろん、吃音者の意識のうちで、吃音者で〈ある〉（＝〈ありたくない〉）現実から、吃音者で〈ない〉（＝〈ありたい〉）現実へと跳躍を成し遂げたとして、外見上の吃りにはほとんど変化

はないかもしれない。精神と身体との間には〈ずれ〉が存在するからである。

だが、いったん跳躍を成し遂げた吃音者は、自己の吃音に哄笑を浴びせかけるであろう。自己に向けられる哄笑は、人間的状況の両義性を受け入れたことだからである。

注

- (1) 人間のすべての行為は、主観的に解釈された意味をもつ対象と意味をやりとりすることにほかならない。そのなかでも圧倒的に多いのが人間関係の行為であり、それはシンボルを媒介にした相互作用なのである。シンボル、ことに言語記号は人間関係の行為の重要な媒体となる。発話行為とは、言語という記号がもつ意味する機能によって他者に働きかける記号行為であり、さらに、あらゆる人間関係の行為の根源をなしている。
- (2) Derridaは、《自分が話すのを聞く》という作業は、絶対的に独自の自己-触発であり、これこそが言の本質ないしその規範性である、と述べている。(Derrida, [1967 = 1970 : 148])
- (3) 連発型吃音と難発型吃音との中間に位置するのが、「ターマゴ」のように、第一音を不自然に長く伸ばして発音する伸張型吃音である。これは、連発型から難発型への過渡的形態であるといっておかぬ。重要なのは、この3類型のいずれもが言葉の第一音の発音に支障をきたすことである。なるほど、「私が語を知ってそれを発音するためには、その語を私の心に表象する必要はなく、その語の分節のおよび音声の本質を私の身体の可能な使用法の一つ、転調の一つとして所有すればそれで十分」(Merleau-Ponty [1945 = 1967 : 297])ではあろうが、自分が発音しようとしている最初の言葉は脳裡に思い浮かべる必要があり、そして、最初の第一音がなめらかに発音されてこそ言葉は自律的に流れ出てくるのである。すなわち、本来、無意識的に発音される言葉ではあるが、その〈扉〉には意識が介入する度合が高く、このことが、吃音者の意識的ないしは半意識的な発語努力と相乗効果を生み、吃音者に負担を強いるものと考えられる。なお、連発型吃音は〈幼児〉の吃音者に、難発型吃音は〈成人〉の吃音者に各々、対応するが、吃音者といっても個別的な人間であるから、なかには、成人であっても〈幼児〉の連発型吃音「者」である場合もある。したがって、本稿で使用している〈成人〉、〈幼児〉という用語は、それぞれ、成人性、幼児性といった意味である。また、連発型は難発型を「基礎づける」関係にあるが、この両者はその発現形態のみならず、それが吃音者に与える〈衝撃〉の度合も著しく異なる。連発型の吃音者は、自分が吃っていることに気がつかないことが多く、いわば〈自然〉に吃っているのに対し、難発型の吃音者は自分の吃りを切実な問題としてとらえ、言葉を発する前から、吃るのではないかという不安感に襲われつつ、それを〈予期〉する。
- (4) 連発型は吃音者のみならず正音者にも見られる自然な吃り方であるのに対し、難発型こそは、吃音者のみで見られる彼らに特有な吃り方なのである。吃音者が抱える問題は、言葉を思うように話せないという社会生活上の不便さだけでなく、人間としての自己自身に対する〈無能力さ〉なのであり、その時、彼らは「人生からの隔絶感」を深く味あうこととなる。さらに、吃音者の苦悩は、実際に吃って四苦八苦している最中よりも、言葉を発する前の吃るのではないかという不安感こそある。吃音は偶発的に発現するから、吃るにしろ、吃らないにしろ、実際に話すことを始めないかぎり、そのどちらであるとも〈確定〉はできないのである。この偶発性が吃音者の不安をいやがうえにも高めることとなる。

- (5) ここでいう思春期とは、12, 3才から15, 6才までの時期を指す。連発型から難発型への移行期が思春期であることは、筆者のみならず筆者の吃音者の友人達にほぼ共通するところであった。また、幼児期における発吃的時期は、吃音者本人でも確定できないが、思春期において、難発型の成人の吃音者として〈誕生〉した〈いま・ここ〉は鮮烈に記憶されているものである。
- (6) 「病態は常態の誇張にすぎない」とすれば、異常な発話行為である吃音にこそ発話行為の本質が誇張された形で現われているはずである。筆者が今後、目ざすのは吃音を通しての発話行為それ自体の究明である。
- (7) もちろん、思春期以前はすべて自他が未分化だということではない。当然ながら、幼児も羞恥心をもつが、それと思春期における羞恥心とは〈質〉が異なるといえよう。
- (8) Merleau-Ponty [1953 = 1966]
- (9) Sartre [1948 = 1958 : 96]
- (10) 市川 [1977 : 27 ff]
- (11) 正音者には理解しがたい話すことに対する吃音者の恐怖は、睡眠中に起こる「金縛り」の状態において感ずる恐怖に似ている。金縛りとは、意識だけが覚醒し、身体は眠ったままといった意識と身体とが分裂した状態であり、意識によって身体が制御できなくなる事態である。金縛りが何度も起きると、眠る前からその恐怖に襲われ、眠ること自体を怖れるようになるのと同様に、吃って話すことができなくなる経験が重なると、吃音者は話すこと自体を怖れるようになる。
- (12) 人間の生命維持機能のなかで、呼吸作用のみが、ある程度、随意に調節できる。このために、発話行為が可能となると同時に不可能ともなるのであろう。言葉を音声現象として外化できない状態におちいった吃音者にとっては、その呼吸作用は全く停止してしまっているのである。野口三千三は、吸息は集合であり、準備であり、貯蓄であり、呼息は解放し、行動し、完成するものであり、かつ、呼吸作用は意識の世界から無意識の世界への唯一の回路であると、述べている。(野口 [1972 : 81 ~ 94])
- (13) 情動とは、われわれの世界内存在の変様である。(Merleau-Ponty [1945 = 1967 : 309])
- (14) Merleau-Ponty [1945 = 1967 : 144]
- (15) Sartre [1948 = 1958 : 113]
- (16) 知覚するとは、まなざしを向けることであり、ひとつのまなざしをとらえるとは、世界のなかにおける対象—まなざしを把握することではなく、まなざしを向けられているのを意識することなのである (Sartre [1948 = 1958 : 90])。すなわち、自己が他者をまなざすときは、他者は客観的な眼となっており、逆に自己が他者によってまなざされているのを意識するときには、自己は対象化された眼となっているという対抗的・相補的な関係が、少なくとも吃っている吃音者とその聞き手との間に成立する。
- (17) Sartre [1948 = 1958 : 91]
- (18) 市川 [1977 : 52]
- (19) Merleau-Ponty [1945 = 1967 : 322]
- (20) Merleau-Ponty [1945 = 1967 : 298]

<付記> 本稿は、第52回日本社会学会において筆者が<実演>付きで行なった報告をもとに、その修正・加筆を施したものである。

〔文 献〕

阿坂卯一郎, 1972, 『はなしことばと第三言語』 青雲書房

伊藤伸二(編), 1976, 『吃音者宣言』 たいまつ社

市川浩, 1975, 『精神としての身体』 勁草書房

Kwant, Remy, C. 1965, Phenomenology of Language, Duquesne University Press. = 1972.

長谷川宏訳, 『言語の現象学』 せりか書房

岸田秀, 1977, 『ものぐさ精神分析』 青土社

Sartre, J.P., 1948, L'être et le neant, Gallimard=1958

松浪信三郎訳, 『存在と無』 第2分冊, 人文書院

滝浦静雄, 1978, 『言語と身体』 岩波現代選書

竹内敏晴, 1975, 『ことばが劈かれるとき』 思想の科学社

Derrida, Jacques, 1967, La voix et le phénomène Presses Universitaires de France = 1970

高橋允昭訳, 『声と現象』 理想社

野口三千三, 1972, 『原初生命体としての人間』 三笠書房

Merleau-Ponty, Maurice, 1954 et 1964, L'Oeil et L'esprit, Gallimard = 1966, 滝浦静雄他訳, 『眼と精神』 みすず書房

Merleau-Ponty, Maurice, 1945, La Phénoménologie de la Perception Gallimard = 1967, 竹内芳郎他訳, 『知覚の現象学』 1, みすず書房

矢野武貞, 1975, 『「吃音」の本質』 弓立社

吉本隆明, 1971, 『心的現象論序説』 北洋社

(ながい ひろかつ)